

いる。これに対して、堀要（名大）からも、事例報告が参考意見として出され、数の名称を知ること、数能力があることに通ずる。だから数唱や計数指導が必要であるという賛成意見が出された。また堀要から、精薄では、5よりも3とか7の理解がむずかしい。数の理解は、数の性質によって違うのだという経験論も報告された。

三船ら（220, 221, 222）の研究では、数の保存概念の学習過程を分析しようとするもので、特に保存反応の生起およびその構造的転移が強化（反応の正誤について外部から与えられる情報）と子どもの推理活動などによる内部象徴反応の体系化（内衡化）に、それぞれどれ程依存しているかを明らかにしている。詳細な実験計画に基づいての研究報告である。これに対して、川口（関西大）から訓練の効果があつたように報告されているが、それは訓練だけの効果なのか、幼稚園での他の効果、すなわち、先生の扱い方、園の指導方針などの条件によって効果も変わってくる。実験期間が短かいから、実験によ

る訓練効果だけとはいえないという意見がだされた。これに対して、伊藤より同じ幼稚園で、年令、IQは、controlしたが、他の保育全体についてはcontrolできなかったし、調査もできなかったので、その点の追究は不十分であったと反省があった。また影山（東教大）より、保存ができたというのは、数領域である一定の思考発達の水準を示すものと考えられるが、その点について、もしそれなら、次の段階へどのような可能性を与えているものなのかという意見に対し、伊藤から保存ということを経験形成と関係づけて把握しようとしているのでと報告があった。

以上が討議の概要であるが、幼児の数に関する研究への関心は強く、終始熱心に研究発表と討議がなされた。

今後の方向として、一定の指導に基づいた長期の研究や、研究者間の相互連絡討議を密接にし、この分野の研究の発展が期待される。（松原達哉・浅田ミツ）

## d 幼 児 III

- 223 幼児の創造性思考に及ぼす要因について  
阿部 智江（茅ヶ崎恵泉学園）
- 224 幼児の異性玩具に対する回避行動  
小橋川 慧（琉球大学）
- 225 選好の推移律の発達のパラドックス  
○東 洋（東京大学）  
前 典子（日本女子大学）
- 226 幼児前期における粘土操作の発達に関する研究  
○金 井 淑（お茶の水大学）  
○岡 本 明子（ ）  
津 守 真（ ）
- 227 幼児前期における歌唱およびリズム反応の発達に関する研究

当セクションにおいてあつかわれたのは、幼児に関する研究のうち、認知、概念、思考等のカテゴリーにおさまりきらないものであつたようである。ブルーナーのいわゆる離接カテゴリーで、討論の焦点をあわせてゆくのは必ずしも容易ではなかつた。発達関係を段階別に横割りにされたプログラム作成者の御苦心はよくわかるし、大体において成功だつたと思うが、当セクションの諸発表のような場合は、あるていどたてにのばして、学術的関心の系統でまとめていただくことができたら、と

いう気もする。これはまとめを書くのに難渋している司会者の愚痴に類するもので、どの学会においても避けられないことではあるし、今大会ではこの種の困難はほとんど最小限におさえておられたと敬意を表しているのだが、今後のために一言しておく次第である。

223 番阿部智江の発表は、幼児用の創造性テストを試作し、その得点と、教師評価による幼児の性格や、親の養育方針、家庭背景などとの関連を分析したものである。教師の「言いなりにならぬ」という評価と正の相関、親の「まじめさ」を指向する養育方針と負の相関があらわれていることは注目にあたいする。テストの採点方法や、あらわれた反応の質などに関し、2, 3の技術的質問がおこなわれた。実証的研究がほとんどおこなわれていない領域だけに、方法上の困難はあつても、いくつかの positive な結果が得られたのは心強い貢献だといえよう。

224 番の小橋川慧の報告は、中性玩具と異性用と文化的に規定されている玩具とのある場面で、幼児が異性玩具を避ける傾向を、成人がついている条件下とついでない条件下とにおいて、視線、接触、接触潜時等を測度として実験的に研究したものである。男児においては成人の在・不在と回避傾向の間に、成人在の場合に異性玩具を避ける傾向が強いという交互作用が、また女兒の場

合には同じ交互作用が年長児においてのみあらわれるという3重の交互作用がみとめられた。この発達に関し、親の養育態度の影響如何、また回避とみなすよりもless attractiveとみなすべきではないか等、質疑応答が行なわれた。性の役割が文化的に形成されてゆく過程にメスを入れる実験として、示唆に富む研究である。

225の東洋、前典子の発表は、幼児の3対象に関する選好のtransitivityが、4、5才児において一時期減少すること、また減少のピークが、対象の訴求力により異なることを指摘したものである。推移率という概念を知的論理的な認識の水準においてでなく反応がtransitiveであるかどうかという水準で用いることの当否、パラドックスという用語の当否などが討論された。

226の金井淑、岡本明子、津守真のは、2才児の集団保育場面において自由に粘土あそびをさせた場合、15回の保育期間中にどのような行動の型とその発達が見られるか、また、そのような保育を経ないものと比較した場合どうか、を検したものである。経験を通じて粘土を用

いておこなう操作の種類や複雑さが増し、また、道具の使用傾向が増すことが観察された。これにつづく同じ発表者による227は、同じ2才児群に対し同じ期間、歌唱指導と楽器遊びをおこない、音楽や唱歌に関する反応の変化を統制群と比較したもので、発表者らの作成したスケール上での一般的な進歩がみとめられたほか、特に指導しなかったリズムのとり方について進歩がみとめられた。なお226、227とも精薄幼児に対する効果の検討をあわせおこなっているが、特に保育効果はみとめられなかった。この2研究を一括して討論がおこなわれ、尺度値の内容や研究条件の統制等に関する質疑応答があった。2才児に対する長期保育の効果検討の手がかりとして貴重な仕事であるといえよう。

冒頭に記したようなわけで、一括して傾向を求めることはできないが、討論に研究方法や研究の論理に関するものが多く見られたことは、従来技術的に甘いところのあったこれら諸問題の研究の将来における進展の基礎として、有意義であったと考えている。(東洋・金井淑)

## e 児 童 I

### 228 児童の道徳判断の発達の研究

—特に罰の概念と母親の養育態度との関係について—

倉貫美紀(京都大学)

### 229 人間愛の発達についての研究(I)

—(1) 本研究のねらい—

○沢田慶輔(東京大学)

大西文行( )

神保信一(明治学院大学)

石塚喜三郎(東京武蔵野第四小)

上野武雄(東京・中村中)

沼田泉(東京・台東区教委)

### 230 —(2) 親子愛の発達—

沢田慶輔

○斎藤昭次(東京・根岸小)

大橋一憲(東京・池袋中)

沼田泉

氷室英夫(東京・武蔵野第一小)

### 231 —(3) 子に対する親の意識の地域差—

沢田慶輔

○大橋一憲

沼田泉

斎藤昭次

加部佐助(東京・葉川九中)

### 233 —(4) 友人愛の発達—

沢田慶輔

○氷室英夫

石塚喜三郎

上野武雄

斎藤昭次

### 233 —(5) 自己愛の発達—

沢田慶輔

○和田三郎(東京・深川三中)

神保信一

加部佐助

石塚喜三郎

### 234 —(6) 人間愛の構造の分析 I—

沢田慶輔

○大西文行

上野武雄

沼田泉

和田三郎

### 235 —(7) 人間愛の構造の分析 II—

沢田慶輔

○加部佐助

神保信一

和田三郎

上野武雄